

『マンズフィールド・パーク』における自然

相 澤 興 一

Nature in *Mansfield Park*

Koichi Aizawa

序

ジェイン・オースティンの小説の世界は、女主人公をめぐる恋愛と結婚がメインプロットとなり、彼女たちの恋愛と結婚の相手となる男性と両者を取り巻く親、兄弟姉妹、親戚、隣人、友人などの織りなす人間模様が物語の大半を構成する。女主人公は恋愛相手や周囲の人間との関わりにおいて、例えば、キャサリン・モーランド (NA), マリアンヌ・ダッシュウッド (S&S), エリザベス・ベネット (P&P), エマ (E) のように、何らかの覚醒 (awakening) を経験し、変貌・成長を遂げることによって恋愛と結婚を成就して物語は終結する。一方、エリナー・ダッシュウッド (S&S), フェニー・プライス (MP), アン・エリオット (P) のように、女主人公自らは不変の徳を体現し、変わらぬ愛を将来の夫となるべき相手に抱きつづけ、相手の変容によって恋愛と結婚が成就する場合もある。いずれの場合も読者の関心はその経緯に集中するといってもよい。

物語の展開する場所 — 背景 — は、田舎の土地所有の紳士階級 (landed gentry), その生活の場である屋敷 (House), コテージ (Cottage) での社交の場、隣人同士が招待しあって開催される舞踏会 (ball) や夕食会 (dinner party), その後に開かれるカードゲーム, また馬車による小旅行 (excursion) などである。

このような催しにおける中心課題は、専ら「人事」(human affairs) — 人間関係 — に関わるもので、物語の展開は全知の語り手による登場人物とその人間関係の説明、登場人物の会話・行動、それらについての同じ語り手のコメントなどによってなされる。したがって、人物たちが置かれる場所、住まいや建物、それを取り巻く環境は独立して存在し、人物との関係については、余り言及されないのが普通である。言及されても読者の関心を余り惹かない場合が多い。ところが『マンズフィールド・パーク』においては背景が重要な意味を持っていると思われる場合が多い。人物たちが生まれ育った土地柄や背景が人格形成に及ぼす影響が暗示的に示され、背景がある価値を具現すると思われる場合がある。

本論考は、『マンズフィールド・パーク』におけるこのような背景の取り扱い方に注目し、その役割について検討しようとするものである。特に余り言及されることのない自然が特に女主人公フェニーに対して持つ重要な意味と役割について詳しく検討するものである。

I

オースティンの6大作品の中で『ノーサンガー・アベイ』, 『マンズフィールド・パーク』は、他の作品とは違って物語の展開する中心的な場所 — 背景 — が題名として採用され、これらが重

要な役割を果たしている。前者は女主人公キャサリンにその熟読するゴシックロマンス的想像を掻き立てると共に、彼女を「迷妄」から「現実」へと覚醒させる役割を果たす。後者は養子として引き取られた女主人公ファニーが育ち、その価値に目覚め、ひいてはその守護者 (guardian)⁽¹⁾ また「不可欠の柱」(the indispensable mainstay)⁽²⁾ として納まる場所となる。その価値とは準男爵サー・トマス・バートラムの領地 (estate) マンスフィールド・パークが元来持つあるいは培ってきた伝統的価値である。ファニーの見出す「上品さ、礼儀正しさ、規則性、調和、そして多分、いずれにも増して、平和と静寂」(The elegance, propriety, regularity, harmony — and perhaps, above all, the peace and tranquility of Mansfield Park, 391⁽³⁾) である。これは出生地ポーツマスに訪れてファニーが改めて目覚める価値である。これらの価値が何によって成り立ち保障されるかが本論の最終目的であるが、ここではまずポーツマスという背景が持つ意味について検討する。

ポーツマスの自宅は期待に反してファニーに「失望」(disappointment, 388) しかもたらさない。それが「騒音、無秩序と無作法の住みか」(the abode of noise, disorder, and impropriety, 388) だからである。ファニーはポーツマスで過ごす中で「マンスフィールドこそ故郷」(Portsmouth was Portsmouth; Mansfield was home. 431) であることを悟る。ファニーが最初にポーツマスに到着する時の様子は次のように描かれている。

The next morning saw them off again at an early hour; and with no events and no delays they regularly advanced, and were in the environs of Portsmouth while there was yet daylight for Fanny to look around her, and wonder at the new building. — They passed the Drawbridge, and entered the town; and the light was only beginning to fail, as, guided by William's powerful voice, they were rattled into a narrow street, leading from the high street, and drawn up before the door of a small house now inhabited by Mr. Price. (376-7)

ファニーは新しい建物、跳ね橋 (the Drawbridge) を眺め、本通りから狭い道を通って、小さなプライス家 (a small house inhabited by Mr. Price) に到着すると述べられている。ポーツマスがにぎやかな港町であることが分かる。ポーツマスは15世紀初頭から中期にかけて東洋からの香辛料の輸入港として栄え、パブと売春宿が乱立し危険に溢れる街 (town) であったという。1729年には英国海軍兵学校 (Royal Naval Academy) が設立され、軍港の町として発達した。ネルソン提督がトラファルガーの戦いに赴いたのもこの港からである。作品の背景となる時代はほぼこの時期と重なっている。港には軍艦が頻繁に出入りし、軍人たちのたむろする活気にあふれる街であるとともに喧騒と雑踏の街でもあったことが想像できる。プライス氏はもと海軍大尉 (Lieutenant of Marines) であるが身体に障害を負い仕事もできず (disabled for active service, 4) ぶらぶらしている様子がかげえる。軍人としての名誉や栄光から見放された大酒飲みのぐうたらに落ちぶれている。ポーツマスという軍港の街の落とし子ともいえる。

Nobody was in their right place, nothing was done as it ought to be. She could not respect her parents, as she had hoped. On her father, her confidence had not been sanguine, but he was more negligent of his family, his habits were worse, and his manners coarser, than she had been prepared for. He did not want abilities; but he had no curiosity, and no information beyond his profession; he read only the newspaper and the navy-list; he talked only of the dock-yard, the har-

bour, Spithead, and the Motherbank; he swore and he drank, he was dirty and gross. (388-9)

She might scruple to make use of the words, but she must and did feel that her mother was a partial, ill-judging parent, a dawdle, a slattern, who neither taught nor restrained her children, whose house was the scene of mismanagement and discomfort from beginning to end,... (390)

ここに描かれるのは自堕落で無責任な両親の姿である。子供たちは野放し状態で躾も教育もされない。

オースティンは環境と教育が人格形成に大きく影響するという考えを持っている。例えば、ミセス・プライスは姉のレディ・パートラムと同様、性質が元来「のんきでものぐさ」(easy and indolent, 390)であり、後者の立場にあれば、同じように「貫禄のある立派な女性」(a good woman of consequence)となりえたと述べられている。また、二人の現況を比較してファニーに次のように嘆かせている。

It often grieved her to the heart — to think of the contrast between them — to think that where nature had made so little difference, circumstances should have made so much, and that her mother, as handsome as Lady Bertram, and some years her junior, should have an appearance so much more worn and faded, so comfortless, so slatternly, so shabby. (408)

環境によって性格ばかりでなく容貌すら影響を受けるというのである。もちろん貧しさと大所帯という経済的な状況も大いに関与していると考えられる。しかし貧しいとはいえ、レベッカとサリーという2人の女中を雇っているというからその日暮らしに困るほどの貧乏でもなさそうである。プライス家の家族の自堕落で怠惰なそして雑然とした無秩序な生活はポーツマスという街の喧噪と混雑をそのまま反映しているということになるのではあるまいか。

3ヶ月を過ぎてファニーがポーツマスに対して持つ印象は「街の太陽の日差しには健康さも陽気さもない」(There was neither health nor gaiety in sun-shine in a town. 439)という感慨にも表現されている。これはプライス家そのものの姿でもある。

II

マンズフィールド・パークの伝統と秩序を脅かす人物として登場するのがヘンリー・クロフォードとメアリー・クロフォード兄妹である。2人はマンズフィールド・パークに越してきたグラント牧師夫人の種違いの弟と妹であるが、共通の母親の死後父方の叔父に預けられ育てられている。叔父クロフォード提督夫妻には溺愛されて育てられたという。クロフォード夫人が死ぬと「身持ちの悪い」(a man of vicious conduct, 41)提督は愛人を家に連れ込み、2人は居辛くなってグラント夫妻の家に舞い込んだのである。マンズフィールド・パークに移り住んだ2人はロンドン (fashionable London)⁽⁴⁾育ちの本領を発揮することになる。ロンドンは派手なファッションと退廃を孕む享楽の都市、物欲と利己主義と虚栄の蔓延する流動的な場所として2人に多大な影響を及ぼしている。

ヘンリーはパートラム家の2人娘マライアとジュリアを虜にし、メアリーは息子エドマンドを虜にする。マライアはマンズフィールド・パークの隣村サザトン・コートに住むラッシュワース家の息子ジェームズと婚約しているにも拘わらず、ヘンリーの関心を引こうと妹ジュリアとしのぎを削る。ファニーが密かに心を寄せるエドマンドはメアリーの快活で積極的な魅力に心を奪

われてしまう。

ヘンリーは最初マンズフィールドを訪れた際、マライアがラッシュワース氏と婚約していることを知っているが、妹メアリーとの会話で、彼女が

“And besides, Miss Bertram is engaged. Remember that, my dear brother. Her choice is made.” (45)

と忠告するのに対して、

“Yes, and I like her the better for it. An engaged woman is always more agreeable than a disengaged. She is satisfied with herself. Her cares are over, and she feels that she may exert all her powers of pleasing without suspicion. All is safe with a lady engaged; no harm can be done.” (45)

といって、ジュリアとよりも彼女との親交を深める。マライアは素人芝居の練習で彼に益々熱を上げ、結婚相手をすんでのところヘンリーに鞍替えする様相を呈するが、サー・トーマスのアンティグアからの帰省を機に芝居上演がお流れになって、ヘンリーがマンズフィールドを離れている間にラッシュワース氏とよりを戻し結婚してしまう。

ヘンリーは後にファニーに興味を持ち始め、最初は妹にファニーを誘惑する(“my plan is to make Fanny Price in love with me.” 229)と豪語するが、彼女が自分に一向に傾く気配がないと悟ると本気で結婚を考え始め、今度は妹にも「ファニー・プライスと結婚する決意を固めた」

(You must be aware that I am quite determined to marry Fanny Price. 291)と公言してあらゆる手段で彼女を手に入れようとする。ファニーの愛する実兄ウィリアムの海軍での昇格の口添えをしたり、サー・バートラムの手を借りたり、ポーツマス帰省中のファニーの家族に対する幻滅と傷心につけこもうとしたり、手を尽くす。ところがポーツマスから自宅のあるノーフォークのエヴリングムに帰る途中、フレイザー夫人のパーティーに誘われ、そこでラッシュワース夫人(マライア)に会うことになる。

Curiosity and vanity were both engaged, and the temptation of immediate pleasure was too strong for a mind unused to make any sacrifice to right; he resolved to defer his Norfolk journey, resolved that writing should answer the purpose of it, or that its purpose was unimportant — and staid. He saw Mrs. Rushworth, was received by her with a coldness which ought to have been repulsive, and have established apparent indifference between them for ever: but he was mortified, he could not bear to be thrown off by the woman whose smiles had been so wholly at his command; he must exert himself to subdue so proud a display of resentment; it was anger on Fanny's account; he must get the better of it, and make Mrs. Rushworth Maria Bertram again in her treatment of himself. (467-8)

彼の刹那的快楽主義と虚栄心とがマライアとよりを戻す原因となっていることを示している。

メアリーもやはり快楽主義的傾向があり、エドモンドよりロンドン生活の経験のある放蕩者の兄トムが「快活さと女性への気配り」(liveliness and gallantry, 47)を持っているといって近づこうとするが、トムが競馬に熱を上げ彼女に関心を余り示さないことから、エドモンドに鞍替えする。彼女は、彼との結婚を視野に入れながら、「収入が多いことが幸福を得るこれまで耳にしてきた最高の秘訣」(A large income is the best recipe for happiness I ever heard of. 213)と公言

し、陸海軍の将校、弁護士や政治家などになって (go into law, 93; “You ought to be in parliament.” 214), 世俗的で派手な出世や名誉を求める (rise to distinction, 214) ことをエドモンドに求める。そのことで僧職に就くことを目指すエドモンドを戸惑わせる。

クロフォード兄妹は、このようにロンドンで培われた快楽主義と世俗主義・拝金主義でマンスフィールドパークの伝統によって築かれた安定と秩序を脅かすことになる。あるいは見かけ上の安定と秩序の瓦解を扇動するといえるかもしれない。

ヘンリーはまたサザトン・コートの後継ぎラッシュワース氏の目指す領地・屋敷やエドモンドの移り住む予定のソーントン・レイシーの改良 (improvement) を指導することによって、伝統的な価値の破壊者としての役割を果たすことは、ダックワースの指摘するところである。⁽⁵⁾彼は「改良」(improvement) というよりも、「刷新」(innovation) や「改変」(alteration) がより適切な実態を把握する言葉と述べる。⁽⁶⁾また彼は素人芝居も舞台設定のために部屋の改変を伴うことから伝統破壊の行為として捉えている。

トニー・タナーは、クロフォード兄妹は「自由、娯楽とファッションの世界」(the world of liberty, amusement and fashion),⁽⁷⁾「華美、興奮、活動、娯楽、世俗的な機知と行きずりの関係の魅力にあふれる世界」(a world of glamour, excitement, activity, amusement and all the attractions of worldly wit and casual relationships),⁽⁸⁾しかし、「絶えざる偽りの外見」(endlessly false appearances), 「作法が道徳にとって変わる世界、冷酷な欺瞞、誤魔化し、搾取の世界」(a world in which manners substitute for morals, a world given over to cold deception, manipulation and exploitation.),⁽⁹⁾また「金に対する配慮に支配される世界」(a world governed only by considerations of money)⁽¹⁰⁾であるというロンドン生活の大舞台で、あらゆる領域の対応を容易に駆使する役者「大意匠家」(master stylists) となり、誠意の伴わない演技を身につけ、活力と空虚 (energy and emptiness) が同居する現代人 (a modern pair) であると指摘している。ヘンリーはファニーへの求婚に際してもっとも難しい役 — 誠実の役 (the role of sincerity) — を演じ、ファニーの抵抗と堅固さに会って、挫けてしまうと論じている。⁽¹¹⁾

このようにマンスフィールド・パークはロンドンの申し子クロフォード兄妹の侵入によって破綻の危機を迎えるのである。ここでは触れていないが「ファッションと浪費の習慣」(habits of fashion and expense, 121) 以外に取り柄のないという放蕩者トムの親友の貴族イェイツ氏も、素人芝居の発起人としてマンスフィールド・パークに侵入し、後にジュリアと駆け落ちして、やはりパークを脅かすことになる。2人が出会うのもロンドンであり、ロンドンの腐敗性がここでも暗示されているといえよう。

III

About thirty years ago, Miss Maria Ward of Huntingdon, with only seven thousand pounds, had the good luck to captivate Sir Thomas Bertram, of Mansfield Park, in the county of Northampton, and to be thereby raised to the rank of a baronet's lady, with all the comforts and consequences of an handsome house and large income. (3)

マンスフィールド・パークはここに紹介されるように、立派な屋敷と高額収入という全ての安楽と貫禄が享受できる場所である。準男爵という地位は貴族階級には属さないが紳士階級では最上位に位置する。

ポーツマスやロンドンとは対照的に、先にも述べた通り、特に養子として住み込むファニーにとって静寂と安定が保障される理想の場所として描かれている。しかしその内実はこと人間関係

に関する限り必ずしもそうとはいえないのである。

クロード・L. ジョンソンは、オースティンがマンスフィールド・パークを、父親を「最高権力者」(figurehead of the sublime)⁽¹²⁾とするエドモンド・パーク的な保守的家父長的家族として捉え揶揄しているとしている。彼女のこぼしを借りれば、『マンスフィールド・パーク』は「保守的神話」(conservative myth)を「危うい」(sour)ものにする⁽¹³⁾、「神話性剥奪」(demystification)⁽¹⁴⁾の物語となる。彼女は、家父長としてのサー・トーマスの「品位の装い」(drapery of decency)⁽¹⁵⁾を身につける言行不一致の暴君性を指摘し、夫に飼いならされ愚かでものぐさな妻、エドモンドを除き父親の前では従順を装いながら陰で自分のしたい放題に振舞う利己的な兄弟姉妹、慎ましきゆえに奴隷同様の扱いを受けるファニーの姿をクローズアップする。⁽¹⁶⁾またこれらを許容し陰で支援するおせっかいなノリス夫人の存在にも言及している。

ポーツマスに里帰りする前のマンスフィールド・パークは、ファニーにとって、特に人間関係においては、必ずしも住み易い場所ではない。彼女に気配りをするのはエドモンドのみであって、サー・トーマスを始め他の者はすべて冷淡である。彼女は養子としてやって来た当初から、常に孤独と意気消沈の状態に陥っている。

Fanny, whether near or from her cousins, whether in the school-room, the drawing-room, or the shrubbery, was equally forlorn, finding something to fear in every person and place. She was disheartened by Lady Bertram's silence, awed by Sir Thomas's grave looks, and quite overcome by Mrs. Norris's admonitions. Her elder cousins mortified her by reflections on her size, and abashed her by noticing her shyness; Miss Lee wondered at her ignorance, and the maid-servants sneered at her clothes; and when to these sorrows was added the idea of the brothers and sisters among whom she had always been important as play-fellow, instructress, and nurse, the despondence that sunk her little heart was severe.⁽¹⁴⁾

ファニーの置かれているこの立場は終始変わらないといってよい。彼女はマンスフィールド・パークにおいては常に受け身的で傍観者の立場を強いられている。そういう彼女が危機に立たされるのはサー・トーマスやエドモンドにヘンリーとの結婚を勧められる時である。何事も従順にしたがってきた彼女はここで初めて抵抗する。これがきっかけになってポーツマスの自宅に一時帰されることになるが、ポーツマスの自宅と比較して彼女がマンスフィールド・パークに対して洩らす、「上品さ、礼儀正しさ、規則性、調和、そして多分、いずれにも増して、平和と静寂」の場所であるという前述の感想は必ずしも真実とはいえない。ジョンソンはこの点を指摘し、ファニーがマンスフィールド・パークに求めているものはむしろそれが保障する「富と安楽の価値」(advantages of wealth and comfort)⁽¹⁷⁾であると述べている。それではファニーがマンスフィールド・パークに対して感じる憧れあるいは共感はそのような経済的な安定という現実的なもののみであろうか。

この点について考察するに当たり、筆者はファニーのロマンティックといってもよい側面に注目したい。

ファニーがもっとも愛し尊敬するのは兄ウィリアムである。彼女がマンスフィールド・パークに移り住んできた後、パートラム家の家族の中で、彼女にこまやかな心配りをするのはエドモンド1人である。彼は彼女に読書の指導をしたり、乗馬のための馬の手配をしたり、病弱な彼女の健康について気配りをしたりする。そのような彼に彼女は兄のウィリアムを重ねて見る。彼の読書指導にたいする彼女の反応はつぎのように述べられている。

In return for such services she loved him better than any body in the world except William; her heart was divided between the two. (22)

ここでは明らかに、エドモンドをウィリアムに重ね合わせ2人の間で心が引き裂かれると述べている。彼女の将来の夢でありウィリアムとの約束事に、小さな田舎家で「2人で中年および老年期の生活をずっと一緒に暮らす」(pass all their middle and latter life together, 375)ということがある。このような兄といとことへのファニーの思慕に、ジョンソンは近親相姦性が暗示されることを指摘している⁽¹⁸⁾。筆者にはむしろ少女趣味的といてよいロマンティックな夢のように思える。この願望は世知辛い世間や人間関係、都会の腐敗や喧騒を逃れ、田舎でひっそり自然とともに生きるという願望と通底するといつてよい。ファニーはマンスフィールド・パークの住人の中で、利己主義 (selfishness) を免れている唯一の人物といつてよい。他の人物が自己の利害や欲望に突き動かされる余り、周辺とりわけ自然や時の移ろいに無関心・無頓着であるのに反して、ファニーは孤独を余儀なくされることによって思索的・内省的になり、これらに敏感に反応するようになっている。

Her own thoughts and reflections were habitually her best companions; and in observing the appearance of the country, the bearings of the roads, the difference of soil, the state of the harvest, the cottages, the cattle, the children, she found entertainment that could only have been heightened by having Edmund to speak to of what she felt. That was the only point of resemblance between her and the lady who sat by her; in every thing but a value for Edmund, Miss Crawford was very unlike her. She had none of Fanny's delicacy of taste, of mind, of feeling; she saw nature, inanimate nature, with little observation; her attention was all for men and women, her talents for the light and lively. (80-1)

Fanny agreed to it, and had the pleasure... of having his eyes soon turned like her's towards the scene without, where all that was solemn and soothing, and lovely, appeared in the brilliancy of an unclouded night, and the contrast of the deep shade of the woods. Fanny spoke her feelings. "Here's harmony!" said she. "Here's repose! Here's what may leave all painting and music behind, and what poetry only can attempt to describe. Here's what may tranquilize every care, and lift the heart to rapture! When I look out on such a night as this, I feel as if there could be neither wickedness nor sorrow in the world; and there certainly would be less of both if the sublimity of Nature were more attended to, and people were carried more out of themselves by contemplating such a scene." (112-3)

前者の引用文の中では、ファニーとメアリーの自然に対する感受性の特徴が対比されている。ファニーには「趣味、精神、感情のデリカシー」があり自然や非動物界 (inanimate nature) に対して心が開かれているのに反して、メアリーの「関心はすべて人間 (男女) に、才能は明るく快活なものに」向けられると述べられている。後者では、「自然の崇高さにもう少し注意が払われ、人々がこのような情景を眺めることによって自己から解放されれば、この世の邪悪さや悲しみもより少なくなるでしょう」というファニーの感慨が吐露されている。またその前半では自然には「調和」、「安らぎ」があり、それは「すべての煩いを鎮め、心を高揚させうっとりさせてくれる」という彼女の洞察と体験が述べられている。

先にも述べたように、ファニーはマンズフィールドで人間関係においてはエドモンドとの関係を除いて幻滅しか味わっていない。そのエドモンドもメアリーにうつつを抜かして彼女を妹以上の存在として意識していない。マンズフィールドにおける人間関係で期待できるものは皆無といってもよい。パートラム夫人を手伝う奉仕の喜びくらいである。彼女がポーツマスと対比してマンズフィールド・パークに心惹かれるのはむしろこのような四季折々の自然に抱かれたパークの静謐な佇まいではないだろうか。

They were viewing the country with the eyes of persons accustomed to drawing, and decided on its capability of being formed into picture, with all the eagerness of real taste. Here Catherine was quite lost. She knew nothing of drawing — nothing of taste: — and she listened to them with an attention which brought her little profit, for they talked in phrases which conveyed scarcely any idea to her. The little which she could understand however appeared to contradict the very few notions she had entertained on the matter before. It seemed as if a good view were no longer to be taken from the top of an high hill, and that a clear blue sky was no longer a proof of a fine day. She was heartily ashamed of her ignorance. (NA, 110)

これは『ノーサンガー・アベイ』で、キャサリンがティルニー兄妹に連れられてビーチャンク・リップ (Beechen Cliff) を訪れたときの風景を描いたものである。焦点は絵画の素材としての風景にあり、ティルニーが「絵画的」(picturesque) という概念について講釈を始めるきっかけをつくるものである。このような自然の受け止め方は自然をありのままに受け入れその美や崇高さに感動するファニーの感性とは異質のものである。

『自負と偏見』にもダーシーが住むペンバリー (Pemberley) の有名な情景描写がある。

It was a large, handsome, stone building, standing well on rising ground, and backed by a ridge of high woody hills; — and in front, a stream of some natural importance was swelled into greater, but without any artificial appearance. Its banks were neither formal, not falsely adorned. Elizabeth was delighted. She had never seen a place for which nature had done more, or where natural beauty had been so little counteracted by an awkward taste. They were all of them warm in their admiration and at that moment she felt, that to be mistress of Pemberley might be some thing! (P&P, 245)

これはダーシーの送っている生活の豊かさや彼の人柄、特に外見とは違ってらわぬ — without artificial appearance — 性格を描く間接的な手段として使われている。ペンバリーという背景がダーシーの人格を代弁あるいは象徴していることを示すものである。エリザベスの受ける感動はファニーのそれとは異質のものである。これはエリザベスがダーシーを評価するための手段となるもので、後に彼女が彼との結婚を考えるきっかけとなったという情景である。ここでも環境が人間を、人間が環境を左右することが暗示されている。

マンズフィールド・パークの自然は、そういった意味ではその住人からは独立した存在である。その住人は注意すら払わない。彼らはむしろロンドンの影響にさらされている。自然に心が開かれているのはほとんどファニーのみである。

ファニーの自然への感性は本質的にロマンティックなものである。マンズフィールド・パーク

で夜景を眺めながらファニーが洩らすことばの中に、「ここに全ての絵画や音楽を背後に押しやり、詩のみが描く試みを可能にするものがあるのです」(Here's what may leave all paintings and music behind, and what poetry can only attempt to describe. 113) という部分がある。ファニーは詩人の目を通して自然を見ていることになる。

オースティンは『マンズフィールド・パーク』において、ファニーをとおして利己主義や唯物主義が蔓延する世俗から解放され、自然へ回帰する人間の姿を描こうとしているとあってよい。これはローマン派詩人たちの憧れでもある。オースティンはクーパーなどの詩人に共感を表明すると共に作品に詩的な雰囲気盛り込んでいる。不評を買っている作品に漂う陰鬱さは詩的感性のもたらす陰鬱さであるといってもよい。それがまた作品に深みを与える働きをしている。

自然への回帰あるいは帰依を果たすファニーの伴侶は神への帰依と奉仕を目指すエドモンドである。この作品の主題をオースティンは“ordination”であると述べている。⁽¹⁹⁾ Ordination の意味するところはエドモンドとファニーが選んだこのような道を指すとは考えられないだろうか。

注

- (1) Alistair M. Duckworth, *The Improvement of the Estates*, (The Johns Hopkins Press, 1971), p.79.
- (2) Tonny Tanner, *Jane Austen*, (Macmillan Education LTD, 1986) p.143.
- (3) 引用文末尾の数字は R.W.Chapman版 *The Novels of Jane Austen, the Third Ed., Mansfield Park*, (The Oxford University Press, 1934) のページ数を示す。
なお、略語については、NA = *Northanger Abbey*, S&S = *Sense and Sensibility*, P&P = *Pride and Prejudice*, MP = *Mansfield Park*, E = *Emma*, P = *Persuasion*.
- (4) Yasmine Gooneratne, *Jane Austen*, (The Cambridge University Press, 1970), pp.20-1.
- (5) Duckworth, *Op.cit.*, pp.44-55.
- (6) *Ibid.*, p.55.
- (7) Tanner, *Op.cit.*, p.148.
- (8) *Ibid.*, p.150.
- (9) *Ibid.*, p.150.
- (10) *Ibid.*, p.150.
- (11) *Ibid.*, p.169.
- (12) Claudia L. Johnson, *Jane Austen: Women Politics and the Novel*, (The University of Chicago Press, 1988), p.97.
- (13) *Ibid.*, p.97.
- (14) *Ibid.*, p.100.
- (15) *Ibid.*, p.100.
- (16) *Ibid.*, p.107.
- (17) *Ibid.*, p.116.
- (18) *Ibid.*, pp.116-7.
- (19) R.W.Chapman, *Jane Austen's Letters*, (Oxford University Press, 1932) p.298
A letter to Cassandra Austen, Friday, 29 Jan. (1813)